

浄泉寺報

第43号
2025年
報恩講



報恩講に寄せて

浄泉寺住職 望月廣三

私にとって「報恩講」とは何だろうか？ 今年もそんなことを思いました。そこでまず言葉の意味を考えました。「恩に報ずる集い」、つまり「恩返しをする」法要という意味になります。誰に恩返しをするのか。言うまでもなく、宗祖親鸞聖人の「教え」に対してです。どんな教えに対してか、と自問すると、それは私にとっては「逆

説」の教えです。それは、迷うから救われるのだ、とか、苦しいから求めずにいられないとか…、です。これだけでは何を言っているのか、理解できない人が多いでしょう。そこで端的に言いますと、迷うことや苦しむことに、何ら悲感することはない、むしろこんなときこそ自分を「変身」させるチャンスであると捉えるべきだと聖人は教えているのです。なぜなのか、それは何と言っても人は悩むときは真摯に自分に向き合うからです。幸せな日々を送っているときは、人間は悩まない、だから幸せなのだとも言えますが、そうとも言えないのです。新しい自分を生み出すためには悩みが必要なのです。人間誰しも、悩まなければ、「こんな自分を何とかしたい」とは思わないでしょう。「何とかしたい」という変身への

願望は、苦しみ悩みが基因になるのです。そのことに気づくことが大切なのです。

浄泉寺からのお知らせ

● 春のお彼岸 ●

お参りの日程は、三月上旬におハガキにてお送りします。お寺での彼岸会にもぜひお参りください。

● 同朋会（月例法座） ●

浄泉寺では、毎月お勤めと住職の法話を中心にした同朋会を開催しています。どなたでもお気軽にご参加いただけます。

・ 若坊守のひとりごと ・

まさかという事故や事件が毎日報じられています。報道を知るたび、何が起るのか分からない所で現に生かされている命だと感じます。

「私の」命と握りしめると、死に対して驚き、怒り、絶望します。「私の」子ども、「私の」家族、

「私の」…。この「私のもの」という執着心は、ちよつとやそつとでは消えるものではありません。なぜならこの執着心が「私」という存在の根つこのようなものだからです。私たちの苦しみの根源はこの執着心であり、根深く厄介なものです。しかし同時に救いの縁になる大切なものでもありません。

生まれたものは必ず死ぬという命の道理を受け取り切れず、「どうして」と苦しむ私たちに、親鸞聖人は「生死無常のことわり」とおっしゃり、ただ身の事実を正面から見つめなさいと教えられます。たまたまいただいたこの命が終えていくその時は、ほんの少し「私の」という手の力を緩め、お浄土へ参らせてもらえたらいいのになあと思っています。

（浄泉寺若坊守・釋尼彌名）

お内仏（仏壇）に座る ④ ～「御文」に聞く（4）～

所詮、今月報恩講七昼夜のうちにおいて、各々に改悔の心をおこして、わが身のあやまれるところの心中を、心底にのこさずして、当寺の御影前において、回心懺悔して、諸人の耳にこれをきかしむるように、毎日毎夜にかたるべし。これすなわち「謗法闡提回心皆往」（法事讃）の御釈にもあいかない、また、「自信教人信」（往生礼讃）の義にも相応すべきものなり。しからば、まことにこころあらん人々は、この回心懺悔をききても、げにもとおもいて、おなじく日ごろの悪心をひるがえして、善心になりかえる人もあるべし。これぞまことに今月聖人の御忌の本懐にあいかなうべし。これすなわち報恩謝徳の懇志たるべきものなり。

（『御文』4帖目第5通）

今年も蓮如上人の書かれた報恩講に関する「御文」を紹介します。「[意識]この七昼夜・8日間に渡って勤まる報恩講の間において、皆それぞれに日ごろの自分自身を振り返る心を起こして、親鸞聖人のお姿を映した御影の前において、我が身の愚かさを誤魔化さず、ここに集った人々と毎日毎夜語り合うのがよいでしょう。それは、善導大師の「法事讃」に説かれるところの「仏法を謗る者もすべて阿弥陀さんのはたらきで回心し救われる」という教えに沿っていることであり、同じく善導大師の「往生礼讃」に説かれるように「まず、私一人が阿弥陀さんから賜った信心を得る見本となるのが、周りの人に仏法の教えを伝えることになる」という意義にも合致するものなのです。ですから、真面目に教えに向き合おうとする人は、この自力の心を翻す告白を聞いて、「なるほど」と思って、同じように日ごろの闇にまみれた心を翻して、他力の信心をいただく人もあるでしょう。これはまさに、親鸞聖人の祥月御命日にお勤めをし、集うことの意義といえるものでしょう。また、聖人への心からの報恩謝徳の志というべきものなのです」。

このように報恩講とは、仏教の教えを聞き、ありのままの自分自身の姿を見つめる、大切な機縁です。お斎を一緒にいただいたり、日頃の生活の中で聞こえてきたことを語り合ったりしながら、私自身を確かめる、真宗門徒にとって最も大切な仏事です。浄泉寺の報恩講は年末にあたります。どうぞ毎年身をお運びいただき、一年の終わりに我が身のありのままの姿を確かめ、新たな一年をお迎えいただければと思います。

（浄泉寺若院・釋亜世）

令和8年(2026年)年忌表

ご法事（年忌法要）は、亡き人をご縁に仏さまの教えを今生きる私たちが聞かせていただく大切な機会です。浄泉寺本堂でご法事を勤めることもできます。

一周忌	令和 7 年(2025 年) 亡
三回忌	令和 6 年(2024 年) 亡
七回忌	令和 2 年(2020 年) 亡
十三回忌	平成 26 年(2014 年) 亡
十七回忌	平成 22 年(2010 年) 亡
二十五回忌	平成 14 年(2002 年) 亡
三十三回忌	平成 6 年(1994 年) 亡
五十回忌	昭和 52 年(1977 年) 亡

<発行元・問い合わせ>



真宗大谷派 楠林山 浄泉寺

電話 0799-22-4798

〒656-0026 洲本市栄町4-3-43

ホームページ <http://jyosenji.asei.info>